Title:「Back home」

中村 創太
1979年生まれ、三十路です。帰って来てから10キロ弱太りました・・。

最近のエントリー
- 再び、休載のお詫び (2009.12.19)
- 至極、個人的な都市風景論 ~3~ (2009.12.05)
- 休載のお詫び (2009.12.02)

アーカイブ
- 2009年12月
- 2009年11月
- 2008年09月
- 2008年08月
- 2008年07月
- 2008年06月
- 2008年05月
- 2008年04月
- 2008年03月

投稿カレンダー

カテゴリー一覧

ブックマーク

学校法人 日本写真芸術専門学校
NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE

OLYMPUS
Your Vision, Our Future

RSS 2.0

09.12.19

再び、休載のお詫び

Tweet　Check

現在、『至極個人的な都市風景論~4~』を執筆中ですが、
今回も予定した期日を守る事が出来ませんでした・・。

今回は『駅』に関する文章を書くつもりでいて、
先生方からも色々とアドバイスを頂いたにもかかわらず、
自分の知識不足と取材努力が欠けていた為に、
きちんと自分の中にそういった物を落とし込む事がまだ出来ず、
それを形にする事が出来ませんでした。

せっかく読んで応援して下さっている方々がいらっしゃるにも関わらず、
無礼を散々繰り返してしまい、誠に申し訳ございません。
あきれ果てられてしまうかもしれませんが、
出来る限り早く更新して、年を越したいと思っておりますので、
どうか、もう暫く勉強をする時間を頂きたいと思います。

中村創太

カテゴリ：
post by 中村 創太 | 日時: 2009.12.19 | パーマリンク | コメント (1) | トラックバック (0)

09.12.05

至極、個人的な都市風景論　~3~

Tweet　Check

僕は目的の住宅が、公園の周辺にあるらしいとしか知らなかった。きちんと調べれば所在の見当くらい、すぐに付いたのかもしれないけれど、真っ直ぐ目的地まで行って、ただ折り返すだけでは、幾ら億劫な作業と言え、あまりに味気ない。それに道に迷ったらさっさと諦めて、天気の良い日を見計らって又出直せば良いなどと、惰性の中で考えていたから、僕は吸いかけの煙草を携帯灰皿に押し込むと、公園から放射状に延びている通用口のうちの一番近い所から、ぼんやりとした気分を引き摺ったままで歩き始めた。

中央に車椅子が通れる程の斜面を備えている通用口の階段を上り切ると、住宅道路は真っ直ぐに大通りへ向かう道と、右手の住宅地へ抜ける道とに分かれている。直進しても、来た方向へ戻ってしまうだけだったから、僕は仕方なく体を右側へ向ける。

沿道の南側には、建てられてからまだ間もないであろう小奇麗な、ヨーロッパモダン風の長屋が4棟建っていて、斜め水平にパースを効かせた状態で並んでいる。反対側には高く頑丈なコンクリートの塀を持ち、道路と同じ高さにあるのはガレージのシャッターだけで、家そのものはこちらを見下ろすように建っている、防犯性に優れた合理的な高級住宅と、古くからの敷地を受け継いで、建物と同じぐらい広い庭を持つ代わりに、リフォームによって家そのものに手を加えられている和式家屋とが、交互に並んでいて、割合としてはやや高級住宅側に分がありそうだ。

そもそも、こんな平日の昼下がりに、僕みたいな風体の人間がこんな所をふらふら歩いているとすれば、余程の方向音痴か、泥棒、迷惑なチラシの配達人か、もしくは例の住宅を探している野次馬ぐらいのもので、実際に、僕は野次馬をする為にここまでやって来たのだから、いつ通りすがりのご婦人に冷たい一瞥をくらっても、弁解の余地などない。勿論、その時は空でも眺めながら通り過ぎてしまうか、間に合わなければ、穏やかに柔らかく何の敵意もありませんという顔をして、やり過ごすのが無難だろうと考えていた。

ぼんやりとそんな妄想をしたのは、大通りのエンジン音からも遠ざかってしまって、辺りからは人の気配もしないからで、これでピアノの音色でも聞こえてこようものなら、僕は余計にその場と自分との間に隔たりを感じただろう。

突き当たりで、道は左右に分かれていたが、右手の道は元の公園の方向へ折れ曲がっている。最早、好んで迷子になろうという気持ちはなかったから、このまま大通りに抜けてしまおうとして、左の道を選ぶ。すると、その先で不意に僕の視線に飛び込んだものは、真っ青な空から延びた順光に晒されて、赤と白のストライプが、鮮やかに浮かび上がっている様だった。

突然、その家が現れたように見えたのは、他の家が道路に沿って行儀良く並んでいるのに比べると、例の建物が少し奥まった形で建てられていて、曲がり角からでは姿が見えない為だった。その発見に安堵しながらゆっくりそちらへ近づいて行くと、その家の前面のスペースには、ワゴンが斜めに頭を突っ込んだ状態で止まっていて、その横では、落ち着いた感じの4、5人の男女が明るい声で会話をしている。元々、僕は勝手に建物を撮影したら、そのまま退散するつもりでいたから、家の全景を撮るには、その車が邪魔臭いという単純な理由も含めて、随分不味いタイミ

ングだと考えた。けれど、彼らが丁寧にお礼を言いながら頭を下げている方向の、螺旋階段の上に立っているのは、お馴染みの上下ともに紅白のストライプのスウェットを着こなしている、当の漫画家本人のようだ。どうやら取り巻きは、仕事として邸宅の取材を行っていたマスコミの人々のようで、丁度それが終了した所へ、僕はノコノコとやって来たらしい。

どういう訳か、少しくらい他人に誤解されても気にするものかという心持ちでいたから、僕は勢いに任せて真っ直ぐ氏の方へと近づいて行く。そして、氏が気付いて不思議そうに僕を見つめた所で、初めて小さくお辞儀をした。

「写真を撮らせて頂いてもよろしいでしょうか。」
不覚にも、自分が有名人の前で緊張しているのを感じながら、建物を指差して、出来る限り柔らかくそう言うと、
「どうぞ、どうぞ、僕の写真は困るけれど、家の写真なら別に構いませんよ。」
動ずる事など少しも無い、まろやかな声で氏は微笑んだ。

おかげで、それまで抱えていた倦怠感も少しは晴れた。とはいえ、何の脈絡も無く、僕はその場へ割り込んでいった訳だから、氏が家の中へ戻った後も、カメラマンらしき男性はムスリとした顔で、ワゴンにカメラバックやらジッツォ社の三脚やらを仕舞い込んでいる。僕は、心中で早く車をどけてくれないものかと強く思いながら、家を見るのに夢中になっていてそれには全く気付いていないという振りをした。

紅白に塗られた外壁、屋根の下の出窓の上にちょこんと据えられた漫画のキャラクター、そして、目と鼻がある尖塔は確かに個性的ではある。けれども、僕はその家に嫌らしさなど感じなかった。遠目にそれを発見した時から、なんだ、こんなものかと感じていたのだし、ワゴンが居なくなった後で、改めて正面から建物全体を眺め直しても、縞模様が必要以上に強い主張をする訳ではない。それは他の色との組み合わせによって、全体のバランスをきちんと考慮した配色がされていて、さらには、丁寧に整えられた植木によって、わざわざカモフラージュまでされている。屋根の下の小さな少年にしたところで、表札の代わりだと思えばなかなか洒目っ気があるように見えるし、尖塔でも突き出していなければ、全体のバランスが落ち着きすぎて、却って物足りないと感じてしまうかもしれなかった。

氏は『作品』としてその家を建設したと明言しているし、その家の内装には、氏が今まで描いた漫画をモチーフにして、ステンドグラスや玄関などに、その世界観を再現するような装飾が為され、床や内壁には紅白は勿論、原色を基調としたそれぞれの部屋のテーマカラーで彩られ、さらには遊園地のお化け屋敷張りの仕掛けまで施されているそうだから、子供達や氏のファンならば、きっと興奮して大喜びするのだろう。ただ、僕の場合は口裂け女に追いかけられる夢を見て以来、氏の漫画を読もうとすら考えなかったから、そのような純粋な気持ちでここにいる訳ではない。

僕は例のイザコザを聞きつけて、訴えのように氏の家が景観を破壊するような建物なのか、そもそもそこに広がっている『景観』がどういうものなのか、誰に頼まれた訳でもないのに、それらの疑問を自分の目で確かめたいと考えた、迷惑千万な野次馬でしかない。だから、僕がここへやって来て、唯一感動したものは、その家の持つ周囲への配慮、作品として表現された氏の独特な世界と、反発する現実社会との溝を、外装の絶妙なバランス感覚が埋め合わせている点だった。

色と形のカモフラージュによってバランスを保つ全景、ワゴン車の止まっていたスペースにしても、住人自身の車が見当たらないのを考えれば、視覚のカモフラージュであると同時に、そのような事態に備えた配慮である事はおそらく間違いない。そしてそれらの工夫が、その騒ぎを知る人間には際立って見える為に、別に思っていた程おかしな物でもないとか、むしろ、きちんと計算して造られた良い家だという印象を与えている。

それは起訴によって、その家に備わった新たな魅力とも言える。勿論、氏も紅白ストライプの家を建てると言えば、反対を受ける事はある程度覚悟をしていたのかもしれない。けれどそれは、裁判沙汰という最低の形での非難を受けて、マスコミで騒がれる大事になってしまったのだから、氏としても自分の作品として自由に家を造りたいという、個人的な願望以上の、他人にも理解され受け入れられる物として、その家を造らなければいけないという意識を、はっきりと持たざるを得なかっただろう。

氏がその枠内で自分の個性を発揮する為に、設計者と議論を繰り返したであろう事は想像に難くない。それは、他者と意見を対立させながらさらに高い次元を目指すという、より良い作品を生み出す上で不可欠な努力が、氏と反対者との対立関係を前提に『妥協の許されないレベル』の中で行われた事で、ただの自己表現の遂行だけに帰結しない、作者の個性と他者への配慮とのバランスを両立した類稀な建造物が完成したと言えるのではないか。実際そうだとすれば、何処か皮肉な話ではあるけれど、それにきちんと形をもって答えてみせた氏の情熱や思いやりに対して、僕は素直に敬意を表したいと思った。

とはいえ、自分の家の側に芸術家が越して来てそこに斬新な家を建てると言われたら、確かに僕も呆気にとられるだろう。けれど、それが幾つかのルールに従って建てられる以上は、どんなに気に喰わない建物で、幾らか愚痴を言ってみたとしても、結局いずれは完成するだろうと僕ならば考えてしまう。なぜなら僕の感覚は、ほとんど麻痺していると言っても良いくらい、建物が壊されて、また造られる、その繰り返しに慣れ切ってしまっているのだから。

それは僕達が暮らす都市が、どんなに素晴らしい景観をも、魅力的な価値を持つ『商品』として捉えるような、経済性を重視したシステムの中で作られた空間であって、見慣れた景色が別の景色へ変わってしまう事への住民の郷愁や恐怖など相手にもせず、代わりとして便利で快適な生活を送る為の『サービス』を提供し、満足を与えるという名目の下に、際限なく膨張したものである事は、僕自身、子供の頃から嫌という程感じさせられていて、システム自体が変わらない以上は、幾ら個人を責めたところで、その変化が止まる訳が無いという事を、経験の蓄積によって、しっかりと刷り込まれてしまっている。

確かに、その住宅街は緑の多い大規模な公園の脇にあり、東京でも有数の過ごしやすさを誇る、とても魅力的な場所だと言えるかもしれない。ただ、それだからこそ、そこには車の交通の為にしっかりとアスファルトで舗装された生活道路があり、何の統一感も無い様々な形式の家が立ち並び、大通りにはデパートやホテルのビルがそびえ立ち、駅前の商店街には所狭しと飲食チェーン店の看板が氾濫している。それは周囲の景観を全く考慮されずに、次々とシステムに浸食され続けているという意味では、東京の至る所に見られる景観と本質的に何ら変わりがない。

<続く>

カテゴリ：

post by 中村 創太 | 日時: 2009.12.05 | パーマリンク | コメント (0) | トラックバック (0)

09.12.02

休載のお詫び

Tweet　　Check

去る11月28日（土）にアップする予定でおりました、
『至極、個人的な都市風景論~3~』は、
作者の勝手な都合（知識不足、筆の遅れ、心の葛藤など）により、
更新が間に合わなかった事を、お詫びさせて頂きます。
誠に申し訳ありませんでした。

次回は12月5日（土）を更新予定日とさせて頂きます。
今後も努力させて頂きますので、何卒よろしくお願い致します。

中村創太

カテゴリ：

post by 中村 創太 | 日時: 2009.12.02 | パーマリンク | コメント (1) | トラックバック (0)

Copyright 2008 All rights reserved NIPPON PHOTOGRAPHY INSTITUTE　powered by OLYMPUS